

2020年度
修士学位請求論文要旨

論文題名：日本における上巳の歴史と変遷
—「曲水の宴」から「桃花の節」、「雛祭り」

へ—

国際日本学研究科 国際日本学専攻

文化・思想研究領域

氏名：史 乃チン

学籍番号：4911196002

1、背景

戦前から、柳田国男をはじめの民俗学者たちは、様々な角度から雛祭りの起源について調べ、それぞれの仮説を立ててきた。しかし、それらの説は、雛祭りの起源を山遊び、神送りなどの日本古来の行事や民間信仰と関連付けようとしているので、文献にも考古学にもあまり関心を示してこなかった。一方、文献から雛祭りとお巳の節供を研究するケースも多くあるが、それは主に平安時代と近世に集中しており、中世のお巳に関する研究が極めて少ない。そういう意味で、お巳に関する研究が分断しているといえる。

また、中国に由来する行事なのに、日本のお巳の研究が中国のお巳に触れることが少ないという点は意外である。お巳に関する研究は、日本で中国史の研究者たちにより行われてきたが、日本の民俗研究にあまり紹介されてこなかったのも事実である。

2、目的

お巳の歴史に関しては、まだ幾つかの問題が残っている。まずは中世のお巳の動向についてである。中世のお巳の変容は今まで問題とされなかったので、その実態を追究し、分断されたお巳の歴史をつなげていくのが本研究の第一の目的である。このようにしてお巳の歴史を統括的な視点で見直し、お巳の歴史変容を捉え、そのうえで、「桃とお巳の結びつき」と「雛人形とお巳の結びつき」などの問題について考察し、新しい仮説を立てることが本研究のもう一つの目的である。

3、方法

まず、中国のお巳の歴史をまとめて、その歴史変容を分析し、日本のお巳の研究の参考とする。奈良時代以前にお巳が日本に行われた決定的な証拠はないが、水を使って祭祀をする遺跡が発見された。これらの遺跡については、考古学の研究を活用し、お巳との関連を探った。奈良・平安時代のお巳の歴史については、『古事記』、『日本書紀』、『日本記略』などの歴史書から、『和漢朗詠集』などの漢詩集、『万葉集』、『古今和歌集』などの和歌集、『御堂関白記』などの貴族の日記、『源氏物語』などの物語まで、幅広い資料を使って、奈良・平安時代のお巳の歴史を整理し、その実態を明らかにした。中世の

上巳の歴史については、主に『愚管記』、『師守記』、『看聞日記』などの公家の日記と『拾玉集』、『夫木和歌抄』など和歌集を用いて整理し、そのほか、『今鏡』、『曾我物語』などの歴史・軍記物語も用いた。室町後期から江戸初期までの間の上巳の歴史については、主に『お湯殿の上の日記』、『無上法院殿御日記』を参考にした。

上巳の歴史に関する資料を整理し、分析したうえで、その変化を捉えた。中国の上巳の歴史の変化も参考にして、「桃と上巳の結びつき」と「雛人形と上巳の結びつき」の二つの問題に仮説を立てた。

4、結果

上巳の歴史を整理し、分析した結果、日本の上巳に以下のような変化があることが判明した。

	奈良・平安時代	鎌倉時代	南北朝時代	室町時代	江戸時代
名称	上巳	上巳、節供	桃花の節、節供	桃花の節、桃花の佳節、節供	桃の節供、雛祭り
行事の内容	曲水の宴、闘鶏、歌合、など	曲水の宴、闘鶏、桃花の宴など	闘鶏、桃花の宴、蹴鞠、作文、連句など	闘鶏、桃花の宴、	闘鶏、雛遊び
行事の中心	曲水の宴	特になし	闘鶏、桃花の宴	闘鶏、桃花の宴	闘鶏、雛遊び
上巳の祓の特徴	河原に出づる	なし	なし	祓いの道具（人形）が進上される	人形が進上される

上巳の名称は奈良・平安時代の「上巳」から、南北朝時代に「桃花の節」となり、江戸時代に「桃の節供」と「雛祭り」となった。行事の中心は奈良・平安時代の「曲水の宴」から南北朝時代に「闘鶏」、「桃花の宴」と変わりつつ、江戸時代に「闘鶏」と「雛遊び」となった。

5、結論

中国の上巳の歴史を参考にし、「上巳の祓」は中国文化と日本文化の習合であるという

ことを確認できた。中国の上巳の衰退の原因と同じように、日本の上巳の行事の変化の原因は貴族の衰退であると考えられる。

また、上巳の名称の変化に、桃と上巳の結びつきという要因が見られている。その原因は日本人の「花好き」という民族性と当時の日本にも伝わった「西王母の桃の伝説」二つの方面から考えられる。和歌・漢詩という形で、さらに季節の花という要素も持っている桃の花は三月三日の宴会の主役となり、段々上巳と結びついたのである。その証拠としては、『万葉集』をはじめ、『惟成弁集』、『江帥集』、『後拾遺和歌集』などの奈良・平安時代の和歌集に三月三日の桃花に関する和歌・漢詩がたくさん見られている。このように、鎌倉時代に現れた「桃花の宴」はその反映であり、南北朝時代に上巳そのものも「桃花の節」と呼ばれるようになり、名称まで桃と結びついたのである。この呼び方が江戸時代になると、省略され、今の「桃の節供」になったのである。

雛人形と上巳の結びつきについては、二段階があると考えられる。まずは「ひとがた」と「にんぎょう」の混同である。それは『お湯殿の上の日記』の記述から窺える。元々祭祀具であった「人形（ひとがた）」は室町時代に宮中に献上されるようになり、戦国時代になると、流されずに何度も使われるようになったと推測される。通説の「人形が豪華、立派となったから流されなくなった」ではなく、流されなくなったから、人形が豪華、立派になったのではないかと考えられる。そして「流されなくなった」原因は「上巳の祓」の変化にあると思われる。平安時代の上巳の祓に関する記述に必ず見られる「河原に出づる」という表現が見られなくなり、中世から、祓の行事はすでに水辺で行われるとは限らなくなったと推測される。そして、流されなくなった「人形」は「御はらいのはこ」に入れられたのではないかと考えられる。そもそも「人形（ひとがた）」は札のようなものであったため、「御はらいのはこ」に入れられるのも不自然なことではないのであろう。

戦国時代末期になると、祭祀具の性格を持っている人形がすでにきれいになり、「雛」とも呼ばれて宮中に献上されたという記載がある。このように、元々宮中女房たちの遊びのものであった雛人形は祭祀の道具であった「ひとがた」と混同されるようになり、「上巳の祓」という行事を通じて上巳と結びついたのである。

江戸期に入ると、すでにきれいになって、宮中の方々からの人形が「御はらいのはこ」に入れられ、箱ごとに宮中に献上されるようになったのが、いわゆる「人形箱」で

ある。その人形たちは宮中の方々の身代わりという意味も持ち、きちんと身分により段に並べられるようになり、今の人形並べになったのではないかと考えられる。

6、残された課題と今後の展望

本稿は、江戸時代以降の雛の模様、飾り方、並べ方などを研究の対象にしなかったため、仮説には不十分なところがあると思われる。また、人形といえば、五月五日の端午の節供に飾られる五月人形があるが、三月三日の雛人形より古く、それに影響を与えている可能性も考えられる。これらの点については、今後の課題にする。

そのほか、五節句の一つとして、本稿での上巳に関する結論はほかの五節句にも通用するのではないかという推測をもって、本研究と同じ研究方法で端午、七夕などの行事を考察し、検証していきたい。